「劍禪一如」思想の源流

——沢庵と柳生新陰流——

笠 井 哲

はじめに

「劍禪一如」とは、劍と禪との密接な関連を表す言葉である。具体的には、劍の修行の場を「道場」と呼び、劍の実践的訓練を「修行」と呼ぶこと等が禪の影響によるとされている。このように、身近な事柄からも劍と禪の関連を見ることが出来る。

鈴木大拙は、「禪と劍道とは、両者が究竟において生死二元を超越することを目的とする点で一である」とし、両者の関連を「生死」という観点から同一であるとしている。また両者の身体と心を一致させる修行の過程という観点から、中林信二は、「道元が禪において、『只管打坐』を強調するのも同じである。禪の悟りというものは、認識するものではなく、ただひたすら坐ることであり、その坐ること自体が悟りであるという。武道の心とか精神というものも共通した理解でとらえるべきであろう」と述べている。

このように、禪における修行は、正しく坐り、坐ることに専念集中することにより、悟りの境地に至ると考えられている。また近世劍術においてその修行の中心をなす「形」は、修行者がその形を正しく模倣し、繰り返し練習することにより形にとらわれない自得の境地（身心一如）に至るとされている。つまり、両者の修行が「形から入り形から出る」という同一の修行の過程であると考えられている。しかし、先に述べた用語としての劍への禪の影響、あるいは劍と禪の修行観や心境の共通性は認められるとしても、両者は本来別々のものである。

本稿において、まず柳生宗矩（一五七一—一六四六）の『兵法家伝書』に引用されている禪語の用例を分析する。次に、宗矩の指導者・助言者であった沢庵（一五七三—一六四五）の『不動智神妙録』を考察し、「劍禪一如」の源流を明らかにしたい。

一、禪語の「隠し言葉」的な引用例

「劍禪一如」を考える上で、両者の一般的な捉え方として、前述のように修行観や求める心境の共通性等があげられる。しかし、このような関連以外にも劍術伝書中には多くの禪語の引用例が見られる。そこで、まず柳生宗矩の『兵法家伝書』の禪語の用例を分析しよう。

『兵法家伝書』に「二刀両断」⁽³⁾とあるのは、『碧巖録』第七六則「丹霞問甚処来」⁽⁴⁾の本則にある「二刀両断」からの引用と思われる。また、『兵法家伝書』に「斬釘截鉄」とあるのは、『碧巖録』第二七則「雲門体露金風」の本則にある「斬釘截鉄」からの引用と思われる。『兵法家伝書』に「半開半向」とあるのは、『碧巖録』第十八則「肅宗請塔様」の本則にある「半開半向」からの引用と思われる。したがって、『兵法家伝書』にみる柳生新陰流の太刀名「二刀両断」・「斬釘截鉄」・「半開半向」は、用語の典故として『碧巖録』が考えられる。

この両者の関係について、今村嘉雄は、「伝書や伝巻には、平易な用語では有り難味が薄いので、人間日常の倫理道徳を説いた儒教よりも、陰陽五行説・道教・梵語・仏語などが多用された傾向がある。柳生新陰流にも、一読三読してなお十分に理解できない用語が多い。いわば一種の『かくしことば』

である」⁽⁵⁾と述べている。また中林信二は、『兵法家伝書』において『碧巖録』に出てくる語を、「その意味と特に関係なく、技法の名称として使用している」⁽⁶⁾と述べている。

このように、両氏ともに技法の名称として、禪語の意味内容と直接関係なく使用されたものとし、一種の「隠し言葉」であると述べている。この捉え方が劍術伝書に見られる禪語の引用に関する剣と禪の一般的な捉え方と理解できる。

それでは、なぜ禪語が「隠し言葉」として引用されたのか。理由として、まず次のことが考えられる。

①流派内外における秘密主義

近世劍術においては、流派への新入門の際に「起請文」を提出させて、自派の尊重と他流の非難を厳禁していた。たとえ將軍であろうとも「起請文」を提出させていたことから、如何に流派の秘密主義が徹底されていたか理解できる。

また、流派内における秘事伝授の様子を、富永賢吾は、「新陰流灌頂極意之巻にも、この巻相伝の時、一七日精進し道場莊嚴の次第を以て諸神諸天を供養し、終つて壇前で極意の太刀を相伝すべきものだといっている」⁽⁷⁾と述べている。劍術流派において、如何に秘密主義が徹底されていたかが理解できる。

②流派内の指導の便宜上と流派の存続上の理由

近世劍術の修行様式は、「形」の修練を中心として行われ

ていた。『五輪書』の「風の巻」においては、「他流に、太刀かず多き事」として「太刀のかず余多にして、人に伝ゆる事、道をうり物にしたてて、太刀数おほくしりたると、初心のものに深く思はせん為成るべし」と記されている。「形」が当時の修行の中心であることから、太刀名を秘するということが修行者へ剣術の奥深さを考えさせる一助となっていたことが伺われる。修行者に対して剣術の奥深さを感じさせることは、流派あるいは流祖・指導者等への尊敬の念を抱かせるとともに、流派の存続のためには格好なことであった。すなわち、太刀名を秘するということが、指導の便宜上あるいは流派の存続に関して重要なことであった。

③流派内における伝書の存在意義

これは、先に挙げた理由①、②の上にさらに考えられるものとして、取り扱われてきた流派内における伝書には、次のような存在意義があると考えられる。

伝書は、流派の特性や奥義を著し、奥深く神聖なものとして取り扱われてきた。また秘事伝授、あるいは流派の存続上ということからも、より高度で難解なものである必要がある。このように、流派における伝書は、存在意義という点から禅語の「隠し言葉」的引用がなされたと考えられる。

二、禅語の直接的な引用例

次に、これまでみてきた用例とは異なり、禅語の意味内容を剣術の技法の説明に直接に利用したと思われる引用例について考察する。

『碧巖録』の第八八則の本則「玄沙接物利生」の本則に、「起草只要蛇驚。山僧直得目瞪口呿。管取倒退三千里」とある。『兵法家伝書』に、これを引用し「一、起草只驚蛇と禅に云事あり」とある。前者は、三種の病人に対する済度の方法を例にして、直接ある人を指導するのではなく、他の人を指導してある人に物事を教えるということを述べるために用いられた禅語である。それを『兵法家伝書』においては、剣術における技法論を説くために応用したと考えられる。つまり、相手になるべく一つのことを執着させ平常心を保たせないようにするために、蛇それ自体を打つのではなく、草を打って蛇を驚かすように、相手の意表をつき、その方に心を執着させるという「表裏」の原理の説明に応用したと考えられる。

このような禅語の引用理由としては、次のことが考えられる。剣術の技術の習得様式は、従来「身体で覚えるべきもの」とされてきている。そして剣術伝書において、その技術の説明には、当然体験的・感覚的説明が必要である。しかし、このような彼我の関係における感覚的で微妙な内容は、多くの

場合「以下口伝」とされている。このように、言い表しがたい技術の内容の説明に禅の精神を表す禅語が利用されたものと考えられる。

次に、沢庵の『不動智神妙録』を考察しよう。『不動智神妙録』に、「禅宗には是を還つて槍頭を把つて倒さまに人を刺し来ると申し候⁽⁸⁾」とあるのは、『碧巖録』の第四六則「鏡清雨滴声」の本則の「果然納敗欠、伝槍来也。不妨難当。却把槍頭倒刺人」からの引用と考えられる。前者は、何らかの対象に心が引かれたり、とらわれたりする心の迷いを戒めたものである。また、後者も、雨音を例に上げて何らかの対象に心が引かれたり、とらわれたりする心の迷いを戒めたものである。つまり、『不動智神妙録』においても「非隠し言葉」的禅語の引用が行われている。

このような禅語の引用理由としては、以下のことが考えられる。禅における実際の修行形態は、「調身・調息・調心」という三つの段階を経て行われる。つまり、正しい形をつくることから始まり、呼吸への意識を集中し、さらに形や呼吸、そして何ものにもとらわれない状態（悟り）を自得していくのである。

このような「形から入って形から出る」という修行のプロセスを経て、何ものにも心がとらわれないという禅の修行観あるいは修行精神にみられる心の状態を、剣術における彼我

の関係の感覚的で微妙な心の状態を説明するために、利用したのと考えられる。

結 び

以上の用例分析を通して、剣禅一如の源流には、禅語の引用の仕方に二つの意図があると考えられる。(Ⅰ) 流派における秘密主義・指導の便宜上あるいは、伝書の内容意義等の理由による「隠し言葉」的な引用のされ方である。(Ⅱ) 剣術における彼我の関係の感覚的で微妙な内容が、言葉に言い表しがたいために、禅語を借りて説明しようとしたものである。柳生宗矩の場合は、主として(Ⅰ)であり、沢庵は(Ⅱ)である。宗矩も沢庵の影響で(Ⅱ)を行っていると考えられる。これまでの考察を通して、禅が近世剣術に与えた影響としては、伝書を純粹な技法論にとどめることなく、禅的な心法論により剣術の心法論を説くことの大切さを世に広めたと考えられる。

剣術は、戦国時代より武技そのものと捉えられてきたが、近世剣術において、禅的な心法論を取り入れたことで、『兵法家伝書』にみるいわゆる「殺人刀」から「活人剣」へというように武技そのものの剣術から変容したと考えられる。本来剣術の心法論は、技法に直結した形であるべきである。しかし先に述べたように、剣術伝書に禅的心法論を導入したこ

「劍禅一如」思想の源流（笠 井）

とは、技法を離れた心法論が中心になる傾向を生じさせた。つまり実践から離れ、心法を語ることで剣術を知ろうという一般に「華法化」といわれる傾向をも生じさせたと考えられる。

- 1 鈴木大拙『禅と日本文化』北川桃雄訳、岩波新書、昭和一五年、九八頁。
- 2 中林信二『武道のすすめ』島津書房、昭和六二年、一八七頁。
- 3 『兵法家伝書』、『五輪書』の引用は、日本思想大系61『近世芸道論』岩波書店、昭和四七年によるが、一々の頁数は省略する。
- 4 『碧巖録』の引用は大正蔵四八巻によるが、一々の頁数は省略する。
- 5 今村嘉雄『史料・柳生新陰流 上巻』人物往来社、昭和四二年、二五頁。
- 6 中林信二『日本古武道における身体論』、『理想』六〇四号所収、理想社、昭和五八年九月、一一五頁。
- 7 富永賢吾『剣道五百年史』百泉書房、昭和四七年、四一八頁。
- 8 澤庵和尚全集刊行会『澤庵和尚全集』五巻、昭和五年、一六頁。

（キーワード） 劍禅一如、柳生新陰流、沢庵、碧巖録、隠し言葉

（福島工業高等学校助教授）

会費に関する内規

(1) 会費は、年額次の通りとする。

① 普通会员 六、五〇〇円

② 名誉会員 免除

③ 維持会員 従来 of 負担金額

④ 特別維持会員 五〇、〇〇〇円以上

⑤ 準会員 六、五〇〇円

(2) 本内規の変更は理事会の議決による。

(3) 本内規は平成五年五月二十二日より施行する。

retical consistency with being protected and non-disdaining can be retained. Concerning non-entrusting, however, the consistency cannot be proved well. Therefore although Zonkaku adopted the theory, he emphasized the distinction between *gonsha* and *jissha* to emphasize to Shinran's policy of non-entrusting. This is a characteristic of Zonkaku's thought on the deities seen in the *Shojinhongaishu* and other works.

46. The Source of *Ken Zen Ichinyo* Thought: Takuan and The Yagyū Shinkage School

KASAI Akira

"Ken Zen Ichinyo" is a phrase to express the close connection between Zen and swordmanship. However, both are originally separate. I analyze examples of Zen terms quoted in the *Heihokadensho* of Yagyū Munenori, and consider *The Mysterious Record of Immovable Wisdom* of Takuan who was an adviser of Munenori next, thereby clarifying the source of the expression "Ken Zen Ichinyo." There were two intentions in the way Zen terms were quoted helping us understand the origin of "Ken Zen Ichinyo."

47. A Study of the Sōtō Sect's History

KONDŌ Akimasa

The Sōtō Sect (曹洞宗) was spread through all of Japan by Meihō Sotetsu (明峰素哲, 1277~1350) and Gasan Jōseki (峨山韶碩, 1276~1366), pupils of Keizan Jōkin (瑩山紹瑾, 1268~1325). Among Gasan Jōseki's followers, Taigen Sōsin (太源宗真, ?~1371), Tsūgen Jakurei (通幻寂靈, 1322~1391), Mutan Sokan (無端祖環, ?~1387), Daitetsu Sōrei (大徹宗令, 1333~1408) and Jippō Ryōshū (夷峰良秀, ?~1405), developed Soujiji (總持寺) in Noto (能登) as a home base.

Here I would like to focus on Taigen Sōsin's pupil Sekichyū Eisan (石宙永珊, ?~1487?).

After becoming a priest and walking throughout the land when young, Eisan became Sensō Esai (川僧慧済, ?~1475)'s pupil, and erected the temple Chōshōin (長松院) with the patronage of Kawai Munetada (河井宗忠), master of the center of Matsuba castle (松葉城主). Eisan also lived in Ichiunsai (一雲